

(短報) 学校診断カルテを用いた中一ギャップの分析について (1)

宮城教育大学教育学部・平真木夫

2002年度の調査から始まって、昨年度まで、合計3回の学習実態調査を行ってきた。それらの調査結果をふまえて、今年度と来年度にかけて、小学校から中学校への接続状況に関する調査を行う予定である。今回は調査の狙いと2009年1月に実施した調査結果の要約を報告したい。

さて、中一ギャップという用語、いじめや不登校、校内暴力といった問題行動の増加が取りざたされることが多く、各種の教育委員会の主導で小中連携に関する実践研究が盛んに行われている。例えば、平成17年10月に発表された中教審答申「新しい時代の義務教育を創造する」では、(3)義務教育に関する制度の見直し「学校種間の連携・接続を改善するための仕組み」の検討を開始することが示された(P18)。

この様に現状で中一ギャップという生活・行動面での問題と捉えられがちである(無藤, 2007)。例えば、中一ギャップに関して学力面から小中連携事業を進める意識は弱い。その理由の一つとして、小学校の時点での学力低下が、中学校や高校ほど深刻視されていないことにあるように思われる。2007年の全国学力調査が典型的にそうであるように、これまで行われた調査では、学年の進行にともなって学力が低下する傾向が一貫して示されてきている。この傾向は、学習方略の利用実態に関する調査とも一致している(平ほか, 2005)。

しかし、人間関係の変化や思春期特有の悩みによって中学一年の段階で大きなストレスが生じるのは事実であろうが、そのような問題は何か今に始まった問題ではない。単なる環境の変化ではなくて、中学での勉強についていけない生徒の数が、以前よりも多くなったことが原因と考えられないだろうか？

実際に、テスト不安や学習性無力感といった現象から示唆されるように、中一ギャップの発生メカニズムには学業不振の問題が関係していると予想される。例えばテスト不安に関する研究から、問題行動を起こす生徒の多くは自己肯定感が低く、自己の学習能力も否定的に評価している傾向が示されている(藤井, 1995)。より極端に書くと、高学力の生徒はテスト不安を解消するために積極的に勉強するが、低学力の生徒はテスト不安から逃れるために勉強と関係ない行動を積極的にとり、更に勉強ができなくなるということである。つまり、成績の低下や落ちこぼれが問題行動の原因(ストレッサー)となっていると言えるであろう。

このように考えると、カリキュラムや学習方法の質的な変化に生徒が対応できないことと、中一ギャップの発生とは何らかの関係があると予想される。例えば、小学校と異なって、中学校ではテストで出題される範囲が広くなり、その結果、ノートまとめを意識的に行うなど、中学校では勉強方法を工夫して理解度を深めなければテストに対応できなくなる。この勉強法の工夫は教師から教授されることもあるが、状況の変化にまったく対応できない生徒がでてきても不思議ではない。学力の形成過程を考えると、単に中学になって出来ないことが初めて露わにされていると見なすことができるのかもしれない。

以上のような問題意識に基づいて、特に学習方法(方略)の発達的变化と関連して中一ギャップを考察し、問題行動への対応を考えていきたい。

調査の概要

本研究の質問紙調査では主要教科の全てについて質問してきたが、今年度と来年度は、小中のギャップが大きい教科として算数と理科に絞って調査する計画へと変更された。教科を絞る理由は、質問紙を

用意する手間暇や指示といった現実的な制約が第一にある。特に小学校と中学校とで追跡調査をするときには、できるだけシンプルにすることが必要であろう。また、これまでの調査から「国語と数学」、「理科、社会、英語」をそれぞれ似たグループと見なせることも理由として挙げることができる。平成18年度の調査結果の調査から、「成績に関わらず勉強方法がよくわかっていない国語と数学」、「苦手な生徒でも暗記で最低限度切り抜けられる理社英」という傾向を見ることができた。

質問紙の構成と主な項目は以下の通りである（短報のため、結果のグラフは全てを載せることはできない）。それぞれの質問項目は、はい（5）からいいえ（1）のあいだの5ポイントで回答するようになっていた。有効回答者は、小学6年生男子が194名、女子が198名、中学一年生男子が216名、女子が186名であった。調査協力校は3つの中学校の学区を核として、それぞれの中学校に進学するそれぞれの小学校から構成されており、小学校は合計6校が参加した。

【人間関係と生活実態】

「友人関係：学校を休んだら友達心配する、私の良さを友達は認めている、失敗してもわかってくれる」、「グループ関係：学級の活動はうまくいっている、私の気持ちはうまく伝わっている、学級の活動は楽しい」「教員関係：失敗してもわかってくれる、私は先生に好かれている、私のことを温かく見守っている」、「人的リソース：勉強でわからないところがあったら、友だちに聞く、家の人に聞く、先生に聞く」、「家庭支援：家の人と勉強について話をする、新聞やテレビのニュースをみる、調べるときには本や辞書を使う」

【学習面の実態】

「学習意欲：〇〇は得意/好きな科目である、〇〇を学習していて面白い、大人になっても〇〇を勉強したい」、「メタ認知：分からない理由を考える、弱点を克服する方法がわかる、勉強の目標を決めることができる」、「MOLS：黒板に書かれたことは全てそのまま書き写す、暗記することが重要だと思う、練習を繰り返し行う」、「EOLS：ノートに分かり易くまとめる、意味を具体的にイメージする、理由や考え方も一緒に理解する」、「OOLS：習った内容をふり返りながら勉強する、似たような内容は一緒に覚える、生活と結びつける」

学力問題では、教育機会の公平性と社会的な階層性に関する議論を避けることはできないであろう。本調査でも社会的な階層性と関連した項目として【家庭支援】の項目を用意し、この値が高いほど児童の学力形成に家庭が有効に機能していると推定される。【メタ認知】とは自分の理解状態をどれだけ適切に把握できているかという判断能力である。この能力が高いほど児童は適切な学習方法（方略）を選択できると考えられる。【MOLS】とは暗記・反復志向の単純な学習方略であり、【EOLS】とは単元の意味を理解しようとする学習方略であり、【OOLS】とは応用や活用に重点を置いた学習方略となっている。どれか特定の方略に偏った学習は好ましくないが、学習方法が分からない場合には暗記・反復（MOLS）に偏った学習になりやすいことが知られている。

文献

藤井義久 (1995). テスト不安研究の動向と課題, 教育心理学研究, 43, 455-463

無藤隆 (2007). 幼少連携・小中連携の意義と今後, 指導と評価, 2月号, 4-8.

平真木夫・相澤秀夫・吉村敏之他 (全 46 名) (2005). 「基礎学力充実方策等に関する共同研究報告書」 (8~27 頁)